

棚尾地区まちづくり事業

平成26年3月19日（水）19時～

棚尾公民館3階

第33回 棚尾の歴史を語る会 次第

進行（小笠原幸雄）

1 前回までのテーマに関する参考意見など

達吉のふるさと歌、五代永坂空兵衛と和歌など

2 テーマ57「矢作川と八村川」

(1) 説明（磯貝国雄）

(2) 出席者による補足説明、感想など

3 テーマ58「棚尾の農業用水」

(1) 説明（磯貝国雄）

(2) 出席者による補足説明、感想など

4 連絡事項・情報交換など

第6回史跡巡り「春の矢作川を巡る」

農業用水取水口、渡し舟跡、棚尾橋記念碑、志貴崎公園、平七緑地など

5 次回日程

史跡巡り 4月 3日（木）午前10時から ふれあい館集合

第34回 4月16日（水）午後7時から「本村沿革記録」

第35回 5月22日（木）午後7時から「八柱神社の奉納品」

テーマ57 「矢作川と八村川」

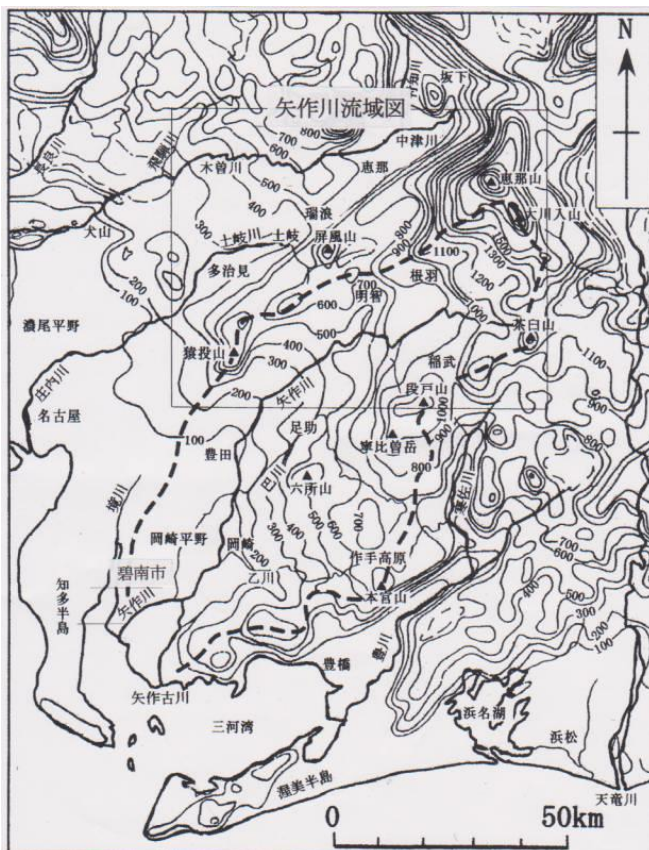
1 要旨

昔の矢作川は、今の矢作古川が本流であった。安城市の木戸から西尾市の米津までは陸地で、米津から南は海が広がっていた。慶長10年（1605）徳川家康は洪水を防ぐため、西尾城主にこの木戸から米津までの開削を命じ、現在の形態である新しい矢作川が完成した。これによって上流からの土砂が海に堆積し、平七新田・伏見屋新田・前浜新田などができ、堤防も築かれた。

従って、油ヶ淵もそれまでは海だったのが湖になった。油ヶ淵に排水している西端、東端、榎前、城ヶ入、中根、米津、根崎、鷲塚の八つの村が共同で鷲塚から神有下、伏見屋を通り南へ流下する川を造ったので、八村（やむら）川と称した。棚尾地区内では志貴崎町、川端町の東を流れていて、現在は蜷川といい愛知県が管理しているが、以前は伏見屋水門から上流を八村川、下流を蜷川と呼んでいた。

2 矢作川の河川流域

流域面積 1, 832 km²



3 矢作川の主な年表

和 暦	西 暦	事 項
慶長 10 年	1605	徳川家康が西尾の城主に矢作新川（今の安城市木戸～西尾市米津間）の開削を命じる。（従前の矢作川は矢作古川となる）
正保 元年	1644	矢作新川の開削により、今まで海であった油ヶ淵周辺や米津の河口に上流からの土砂が堆積したので、米津から鷺塚まで堤防を築いた。これにより油ヶ淵が湖沼となる。
寛文 3 年	1663	稲生平七郎らが碧南市で初めて平七新田を造る。
〃 6 年	1666	江戸の町人伏見屋又兵衛が鷺塚から棚尾まで矢作川の堤防を延長し、伏見屋新田を造る。又、油ヶ淵周辺の池廻り新田（1675）や伏見屋外新田を造る。
貞享 元年	1684	平坂町問屋市川彦三郎によって市川新田が造成され。その外新美新田（1746）、西小柳新田（1778）、小栗新田（1829）など西尾市側でも多くの新田が造成された。
宝永 2 年	1705	油ヶ淵の排水を衣浦湾へ流す川（今の新川）が完成。
文政 11 年	1828	斎藤倭助が前浜新田を完成させる。
元治 元年	1864	名古屋の実業家奥田正香らによって奥田新田が造成される。
明治 14 年	1881	明治用水が完成。碧海台地の開拓が始まる。
〃 21 年	1888	初代棚尾橋架橋工事に着手。
〃 23 年	1890	初代棚尾橋が完成、有料橋であった。
〃 27 年	1894	近江の商人西沢真蔵らにより枝下用水が完成する。
〃 31 年	1898	初代棚尾橋の記念碑建立。
大正 3 年	1914	南奥田新田（チャランコ新田）が7年かけて完成する。
〃 10 年	1921	二代目棚尾橋（長さ431m）完成、主要は鉄筋コンクリートで造られ県下の模範橋といわれる。
〃 15 年	1926	名鉄三河線（矢作川鉄橋）開通。
昭和 3 年	1928	二代目棚尾橋の記念碑建立
〃 4 年	1929	矢作川を詠んだ大嘗祭歌碑建立。
〃 7 年	1932	三河山間部で集中豪雨。
〃 8 年	1933	矢作川が国の直轄河川となり、改修工事が始まる。
〃 18 年	1943	米津町下流の導流堤が県営排水改良事業で完成。
〃 21 年	1946	国営碧南干拓事業に着手。
〃 27 年	1952	国営矢作川農業水利事業（羽布ダム）に着手。
〃 28 年	1953	台風13号に伴う高潮により前浜新田が完水する。
〃 30 年	1955	三代目棚尾橋完成、橋脚を生かし上部のみ改修。
〃 32 年	1957	農林省直轄の国営碧南干拓事業が完成する。

〃 34年	1959	伊勢湾台風。
〃 36年	1961	中下流部の河床が低下し、多くの取水口で取水が困難となり、県の応急対策が始まる。
〃 38年	1963	国営矢作川第二土地改良事業（合口事業）に着手。羽布ダム完成。
〃 41年	1966	建設省直轄の矢作ダムに着手。
〃 42年	1967	四代目棚尾橋（長さ442m）が完成。
〃 45年	1970	矢作川河口堰建設促進期成同盟が結成される。
〃 46年	1971	矢作ダム完成。
〃 54年	1979	国営矢作川第二土地改良事業（合口事業）が完成。
平成 2年	1990	矢作川大橋（長さ486m）が完成。
〃 10年	1998	矢作川河口堰建設が事実上停止される。
〃 16年	2004	名鉄三河線（碧南～吉良吉田）廃止となる。

4 新田開発

慶長10年（1605）新しい矢作川が完成すると、上流からの土砂が流れ込み堆積し、碧南側で、平七・油ヶ淵池廻り、伏見屋・伏見屋外、前浜などで新田が造られた。又、新しくは昭和31年（1951）には碧南干拓も完成した。



5 明治時代の矢作川風景

《矢作川 堤を行けば 幼きの 思い出なつかし ひばりの声哉》

藤井達吉は晩年の自伝的随筆を「矢作堤」と名付けるなど、ふるさとを懐かしみ、矢作川に関する和歌を数多く詠んでいる。山田光春著「藤井達吉の生涯」は次のように述べている。

「べか舟という平舟の帆をあげて荷物を運び、帰りには山の薪炭をもち来て営みたり、その頃の子どもの悪うたに「川舟船頭米かす上手、かじの穴からババこく上手」などと唄ひたり」(矢作堤)

年老いてから郷里に帰った達吉は、散歩の折りに庄三越という渡し場のあった所を通りかかり、その辺りを遊び廻った少年の日を偲んでこう述べている。

棚尾は彼が「野大根の尻尾」と呼んでいたように、矢作川と衣ヶ浦にはさまれた狭い土地ではあったが、川と入江の多いのどかな水郷で、辺りの柳の間では行々子が鳴き、空には千鳥が舞うという、子どもたちにはまたとない遊び場を提供していた。べか舟は九牛平まで矢作川を遡ってこの地で採れる塩や魚貝を運び、薪炭など奥地で採れる産物を積んで戻った底の浅い舟であって、古くからこの辺りで作られていた土雛なども上流へ運んだものであった。

6 庄三（しょうざ）の渡し舟

棚尾橋が架かるまで西小槲と棚尾間に渡し舟があった。伏見屋の伊藤庄蔵、同三津五郎、同三郎が相続して責任者となっていたので、庄三の渡しと呼ばれていた。

西尾市史5に渡船料についての記載がある。西小槲と棚尾間における明治2年(1869)の渡船料は水杭の示す増水量により賃銭が決められている。

右者矢作川庄三郎越渡船賃銭之儀ニ付干川二十四文、暮六ツより倍增賃銭ニ相成候間、前文別紙之通り出水之節ハ段々賃銭増ニ相成候、右五合水之上者渡船留ニ相成候、乍恐此段以書附御届ケ奉申上候、以上

明治2年11月 幡豆郡西小槲新田 地主代 清吉
大濱御役所

※これによると、水量により金額は次の通りに区別されていた。

干川	24文
7寸	36文
8寸～1合(10寸)	48文

1合1寸～1合3寸	60文
1合4寸～2合	72文
2合1寸～2合3寸	84文
2合4寸～3合	100文
3合1寸～4合	200文
4合1寸～5合	300文
5合以上	渡船留め

7 八村川（蜷川）

現在は蜷川と称し市内東部地区を流域とし、愛知県が管理する河川である。しかし、昔は油ヶ淵に排水する周辺八つの村が共同して建設した川で、そのため伏見屋水門から上流を八村川と呼んでいた。

(1) 蜷川について碧南事典の説明

正保元年（1644）に油ヶ淵が海から湖になったとき、湖水の排水のために鷺塚町と旭町の境を掘って海に流したのが、この川の起源である。その後、寛文の頃に伏見屋新田ができるに従い、この川は下流に延長されていき、堀川と呼ばれた。その後新堀川（新川）ができ、この川は鷺塚に渡る二つの橋の部分が埋められて、鷺塚や伏見屋などの悪水だけを流すようになり、新堀川に対して古堀川といわれたが、やがて八村川と呼ばれた。

延享3年（1746）に伏見屋外新田を築いたので、河口は棚尾橋付近まで延長され、文政11年（1828）に前浜新田が築かれて権現崎まで延長したが、満潮時の逆流を防ぐための水門を従来の河口の位置に移した。前浜新田によって八村川が新たに延長した部分、即ち水門より下流2,242mを蜷川と呼んで、上流の八村川と区別した。上流の二つ橋前後は中州によって縦断されて二つ川の形となり、一方は八村川、一方は江堀の悪水を排水していた。その後、河川改修等で川幅や長さを変更し、現在は河口から伏見屋橋までを蜷川という。

(2) 八村川について碧南事典の説明

三宅又兵衛が伏見屋新田を造成した寛文年間に油ヶ淵の排水と新田の悪水抜きのために、鷺塚から大濱下の宮東まで幅18m、深さ2.7m、長さ4.6kmの堀川をつくった。

しかし、上流から流れてくる砂のために矢作川の川底や河口近くの海底が浅くなり、

毎年のように排水不良による不作が続いた。また、元禄末までに度々津波や洪水を受け、矢作川の堤防も二度切れて大きな被害がでた。度重なる災害に新田地主の又兵衛も金策に困り、ついに新田を手放す事態となった。鷺塚村は堀川に架かる橋が流出して孤立したり、池廻りの八カ村（東端村・西端村・榎前村・城ヶ入村・中根村・米津村・根崎村・鷺塚村）は水浸しの農地で苦しむ一方だった。そのために八カ村が相談し、目の危機を脱するために人足を出し合って、橋を架けたり、川ざらえを度々行った。このように八カ村が油ヶ淵の唯一の排水路として自主的に維持手入れに努めてきたため、この堀川を八村川と呼ぶようになった。この八村川の一部が、ひょうたん池などの三つの池として長く残っていた。



テーマ58 「棚尾の農業用水」

1 要旨

棚尾の農地は矢作川沿いの中江町に広がっているが、農業用水は矢作川堤防下に沿って設けられている碧南用水を利用している。前浜にあるポンプ場から各農地までパイプが埋設されていて、必要な時にいつでも灌水できるようになっている。

また、志貴崎町・川端町・若宮町・雨池町などは、かつて水田地帯であったが、この農業用水は、旭、棚尾、大濱、新川の四ヶ町村が共同で鷺塚用水組合を運営していて、鷺林町で矢作川の水を取水し、連合用水路を通じ供給していた。

この他、沢渡町・作塚町・春日町・栗山町の農地は平和用水で灌漑していた。

2 矢作川用水

(1) 沿革

かつて矢作川下流部には28箇所の用水取水口があった。その内、碧南市内は次の6箇所である。

名称	受益面積	受益地	取水口
野銭用水	50ha	野銭地区	野銭町
鷺塚用水	250ha	旭、棚尾、大濱、新川	鷺林町
三角用水	84ha	伏見屋外新田	三角町
中江用水	36ha	中江	舟江町
中流作用水	22ha	亥ノ新田	中江町
前浜用水	95ha	前浜新田	前浜町

(2) 矢作川用水事業

矢作川は上流に明治用水及び枝下用水の頭首工があり、堰堤でせき止めて取水している。明治時代までは、二大用水で取水しても下流部の需要が少なかったため、問題となることはなかった。しかし、その後水田の排水改良と乾田化が進展するにつれて水需要が増えたため、以下のように矢作川用水土地改良事業が進められた。

ア 昭和27年度～37年度 国営矢作川農業水利事業

巴川の上流に羽布ダムを建設し、農業用水を溜める。

イ 昭和38年度～53年度 国営矢作川第二農業用水事業（通称合口事業）

下流部の取水口は河床が下がるなど取水に支障をきたしているため、全ての取水

口を廃止する。代わりに細川・乙川・鹿乗川に頭首工を設置し、取水した水を矢作川沿いに建設する幹線用水路を利用して、各地区への水源とする。

(3) 碧南用水

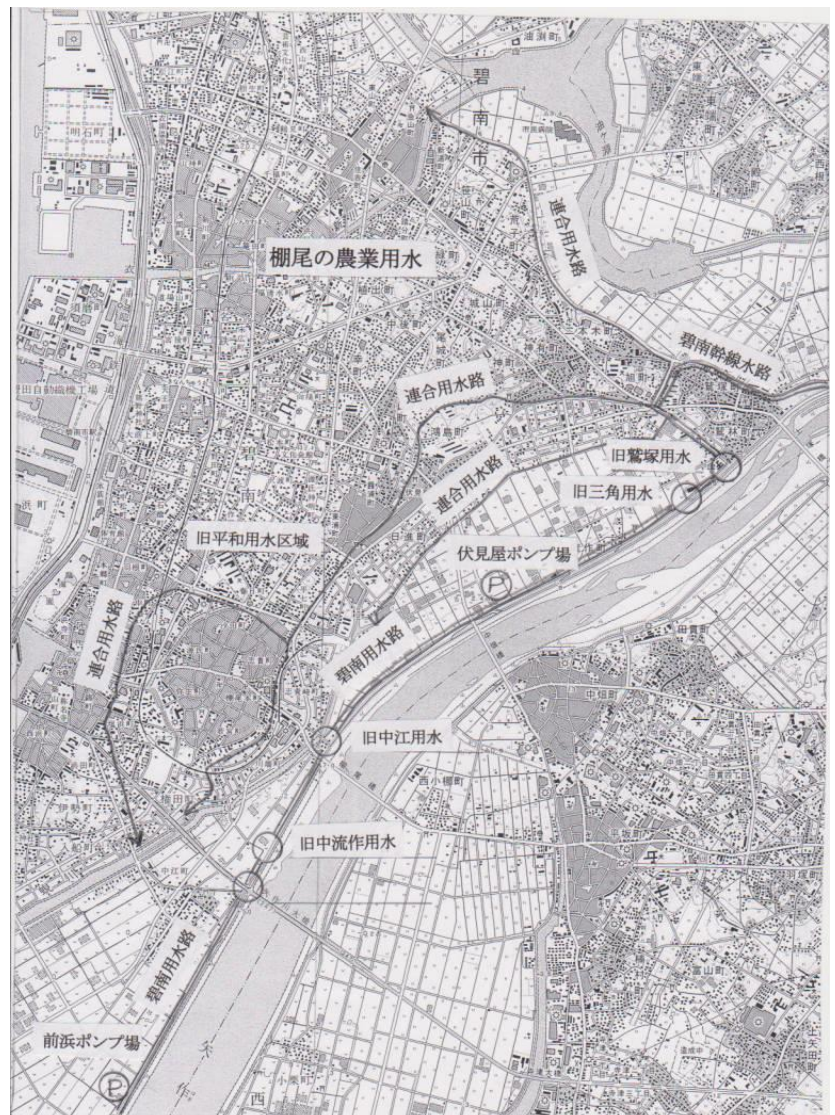
出典：碧南事典

碧南用水は岡崎市内細川頭首工で取水し、矢作川第二幹線水路を通じて碧南市野銭町で受けている。ここから鷺塚地区を経由して鷺林町老人ホーム東に至るまでが碧南幹線水路で、国が管理している。途中では野銭・北浦・連合用水神有・伏見屋へも供給していて、主として水田用に使われている。鷺林町から下流は、矢作川の堤防に沿って川口町までを碧南用水と呼び、碧南市土地改良区が管理している。

碧南用水沿線は、矢作川の砂質土を利用したニンジン・タマネギの生産が盛んである。伏見屋・前浜・川口には用水ポンプ場があり、畑ごとに給水口を設けてスプリンクラーによる散水も行われている。

(4) 中江地区

中江・亥ノ新田地区は前浜ポンプ場から用水の供給を受けている。



3 鷺塚用水

(1) 沿革

出典：碧南市史第二巻による

ア 鷺塚用水組合の創設

連合水利土工会開設願

碧海郡 鷺塚村、伏見屋新田、平七村、棚尾村、北棚尾村、北大濱村、大濱村
右七ヶ村田方灌漑之義鷺塚村地内字又九塚より矢作川流水を引来り以て該費用従
前各村地価令賦支出候処現今に至り不公平の廉有之候に付今般連合会を開設し公
平議決の上賦課仕度依而連合水利土工会開設之義御許可相成度此段願候也

右 村々 惣代

愛知県知事 国貞 廉平殿

前書之通願出候也

18年1月9日 碧海郡第六組戸長 角谷安兵衛 印

第七組戸長 石川八郎治 印

鷺塚用水連合村会開設文書

碧海郡役所 同郡内 自 第六組 至第十組 戸長役場

今般鷺塚用水連合村会開設候此旨相達候事

但本会の議長は該部長を以て之に充管理せしむ

明治18年4月2日 愛知県令 勝間田稔

連合村名 鷺塚村、伏見屋新田、平七村、棚尾村、北棚尾村、北大濱村、大濱村
計七ヶ村 議員の数 議員7名

但連合村々に係る村会議員より一村一名宛の議員を互選すべし

イ 明治37年の受益面積状況 反以下は四捨五入

鷺塚村	59町歩
志貴崎村	40 "
棚尾村	33 "
大濱町	47 "
新川町	13 "
伏見屋村	76 "
計	268 "

ウ 明治40年度の改正

明治39年鷺塚村・伏見屋村・志貴崎村が合併して旭村ができたことに伴い組織を改正した。

鷺塚用水組合規約要旨 明治41年3月8日設置

目的 鷺塚用水に関する事務を共同処分する為旭村・棚尾村・大濱町・新川町四ヶ町村を以て組合を組織する。

組合会議組織 町村会議員中より旭村6名、棚尾村2名、大濱町2名、新川町2名、定員12名を互選する。

事務管理方法 組合管理者1名置き 管理者は関係町村長の互選にて任期4年、組合の収支は管理者の属する町村収入役が取り扱う。名誉常設土木委員旭村3名、棚尾村1名、大濱町1名、新川町1名、定員6名を置き管理者の事務を補助する。

費用支弁方法 一切の費用は組合に属する収入の外、左の課率により各町村に於て分担する。

旭村	0. 5 7 3 1	棚尾村	0. 1 5 2 8
大濱町	0. 2 1 4 0	新川町	0. 0 6 0 1

エ 大濱町誌による説明

明治41年3月25日を以て、旭村外三ヶ町村鷺塚用水組合の創立が認可された。此の組合は旭村、棚尾村、大濱町、新川町の四ヶ町村を組合区域として、鷺塚用水に関する事務を、処分する目的として創立されたのである。その事務所は旭村役場内に置いて、会議員の定数を十二名と規定されている。然して会議員の各町村の数は旭村六名、棚尾村二名、大濱町二名、新川町二名といふ割合になっていて、会議員の資格は組合内各町村会議員の被選挙権を有する者にして、組合内の町村会に於いて選挙された。

任期は町村会議員の任期に従うことになっている。旭村長が組合の管理者となり、有給書記を置いて、庶務に従事させ、管理者の属する町村の収入役に、出納事務を担当させている。斯くして組合の事務の遂行上に円滑を計っている。

(2) 棚尾の受益地

連合用水路は平七町を通過して境橋で分岐して、南は志貴町・棚尾本町・若宮町・雨池町へ入り、余り水は雨池へ放流された。一方、西へ向う水路は汐田町の棚尾公民館前を通った後、ものづくりセンターから大浜町へ入り、羽根町・音羽町・塩浜町・浜

田町・権田町へ達し、余り水は二つ橋の上流で放出された。

尚、志貴崎町・川端町は平七新田の一部であり、碧南市が発足する前は旭村に属し水田地帯であったが、鷲塚用水の受益地であった。

4 平和用水

春日町・栗山町・作塚町・沢渡町・源氏神明町の農業用水は明治41年に完成した平和用水を利用していた。(第29回テーマ51「平和用水」参照)